

寄稿

北海道の児童文学・文化の掘り起こし続けて

—『北海道の児童文学・文化史』の出版—

児童文化研究者 谷 暎子

児童文化研究同人「ヘカッチ」は1992年の発足。埋もれている北海道の児童文学・文化を掘り起こし、研究誌「ヘカッチ」などに発表してきた。「ヘカッチ」はアイヌ語で子どもを意味する。2006年に日本児童文学会北海道支部となり、2022年2月に『北海道の児童文学・文化史』（共同文化社）を出版。北海道の開拓使が設置されて150年間の、北海道の児童文学・文化に関する44の論考を収載した。北海道の児童文学研究の嚆矢は、これの樹の会編『北海道の児童文学』（北海道新聞社1979年）である。この本を手がかりに調査・研究を続けてきた。発足時から、私たちの研究を励まし助言して下さったのは宮沢賢治研究の第一人者・西田良子先生（1931-2018）であった。

『北海道の児童文学・文化史』にみる中島児童会館

札幌市長・高田富興の文化への貢献

弁護士の高田富興（1892-1976）は、戦後の公選市長選で当選し市政を担った。喫緊の課題である主食糧の配給、教育施設の改善などに取り組む。就任3年目の1949年には文化施設3館を開設した。時計台を改修した市立図書館、豊平館を整備した市民会館、GHQ払い下げのかまぼこ兵舎を活用した中島児童会館である。いずれも文化活動の拠点となり市民に歓迎された。小学校教師を経て弁護士となった高田は、「北海道綴方連盟事件」の弁護を担ったことで知られる。

中島児童会館で楽しんだ子どもたち

1949年7月開館の中島児童会館は、国内はじめての公立児童会館である。「児童の文化的素養を培い、その福祉を増進するために」設置（中島児童会館条例）。定員200名の集会室、図書室や工作室もあった。だが夏は蒸し風呂、冬は隙間風で震えるほど寒かったという。それでも「日曜子供会」は定員を越える子どもたちで満員。市内の児童文化団体による口演童話、紙芝居、幻灯、人形劇、児童劇、舞踊、ゲームなどを楽しんだ。ほかに、北海道の出版ブームに児童書を刊行した出版社、科学普及協会、北海道漫画集団なども関わった。図書室も読書好きの子どもたちに歓迎された。1950年には市内小学校を対象に巡回文庫をはじめている。これらは『北海道の児童文学・文化史』

の「札幌の児童文化センターとしての中島児童会館」（谷暎子）に詳しい。

出版社から生まれた専門人形劇団

戦後の出版ブームに出版社から二つの専門人形劇団が誕生した。児童誌「北の子供」創刊（1946.4月）の新日本文化協会・和田義雄が、「北の子供創刊三周年記念愛読者大会」（1948.6月）を機に「こまどり座」を。児童紙「子供の国」創刊（1946.5月）の子供の国・井口幸治らが、読者のための少年劇場（1948.8月）を機に「クレオン座」を立ちあげた。その後「こまどり座」は「北の子供」の宣伝を兼ねて人形劇、口演童話などで地方の小学校を巡演。「北の子供」終刊（1950.1月）後の1951年5月まで道内、東北を巡演した。「クレオン座」は1950年まで、子どもたち、道内の炭鉱や労働組合とその家族に楽しみを届けた。『北海道の児童文学・文化史』に収載の「出版社から生れた人形劇団」、「北海道の児童演劇・人形劇の七十年」（鈴木喜三夫）に詳しい。

北海道の児童文化の掘り起こしは現在も続いている。2023年春には東倶知安村（京極町）の広徳寺・江隈圓導が1928年に開設した北海児童図書博物館について調査。僻村の子どもたちが楽しみ学べる児童博物館、巡回文庫などを展開していたのである。95年を経て明らかになった（「ヘカッチ」19号に収載）。道内には埋もれている児童文化活動があるはず。未来のためにこれからも児童文化の掘り起こしを続けたい。

谷 暎子（たに えいこ）

札幌生れ。児童文化研究者。日本児童文学学会会員。ライフワークは北海道の児童文化史研究。北海道の児童出版物、北海道の紙芝居史研究に携わる。著書に単著『占領下の児童書検閲』（新読書社 2004）、『占領下の児童出版物とGHQの検閲』（共同文化社 2016）、共著『ゴードン W・ブランゲ文庫児童書目録』（ProQuest 2003）、単著『「北の子供」—占領期の地域児童文化雑誌（1946～50） 監修・解題』『金沢文庫』（2023～24）などがある。



障害のある子どもない子どもみんなで創る ～人形劇によるソーシャルインクルージョンの取り組み

(前回からのつづき)

■子どもたち一人ひとりの成長に合わせて

18トリソミーのYくん。Yくんは高校3年生の最年長です。歌や踊りがとっても大好きで、少し落ち着いたみんなのお兄さんの存在です。今回の事業を知って、ご両親は迷ったそうです。果たして参加できるかどうか…。彼の歩みはゆっくりであり、相手の言葉は理解できるが、自ら話しをすることは難しい。果たして楽しめるだろうか、迷惑にならないだろうか…。など、ご両親にとっては不安な点がたくさんあったようです。初回は参加の有無を決めるために見学させてほしいと連絡がありました。しかし、その不安もすぐに消えたようです。朝こそ表情は硬く、緊張していた様子でしたが、初回の活動を終えたYくんの表情は、朝来た時とは大違いでした。みんなの楽しそうで明るい雰囲気がかつても心地よかったです。

今回のPヴァレッジの中で一番成長を感じたのはYくんだったような気がします。回を重ねるごとに笑顔が多くなり、言葉がたくさん出るようになりました。話しかけてくれることも多くなり、ほかの子の行動を観て、「かわい

い」と言ってみたり、困ったことがあれば、心配そうに「だいじょうぶ?」と声をかけ、手を差し伸べてくれ

たり、私が冗談を言えば、笑いながら「おい!」とツッコミを入れたり、彼なりにいろんなものを観て感じているんだと嬉しくなりました。特に成長を感じたのは、クリスマス会本番当日です。小さい子が段取りを間違えたことに気づいて、優しく手招きして呼んであげたり、心配そうに教えてあげる姿を観て頼もしさを感じました。我々にとっては、とてつもない感動です。Yくんは、毎回この活動を楽しみにしてくれるようになりました。お家でも「きょうは、こぐまぞ?」といつも聞くようになっていたと後になって聞きました。合わせて、初回から一緒に参加しているお父さんの表情が一番柔らかくなったかもしれません(笑)

■子どもたちの想像力が未来を創ります

活動は1回2時間。たった2時間の中にも、子どもたちのいろんなドラマが生まれます。悔しいやら楽しいやら、面倒くさいやら、やりたいけどやれないやら…。そこには「生きる」エネルギーがものすごく詰まっています。障害ってマイナスなことだろうか?と最近よく思います。だからこそ、それぞれの個性や特性

を遠慮しないで出させてあげたいと思いました。子どもたちの想像力や表現力が相手の想像を超えれば、きっとそこには尊敬や思いやる気持ち、優しさや豊かさが生まれると信じています。『パペットアートヴァレッジ』というちいさなコミュニティから発信できることはわずかです。しかし、少しずつ差別の無い社会が広がっていけば世の中は絶対に平和になると信じています。

未来への答えは一つではありません。答えがないということが答えなのです。



矢吹 英孝(やぶき ひでたか)

福島県出身。北海道教育大学函館分校卒業。現在、公財)さっぽろ青少年女性活動協会こども若者事業部長。国際人形劇連盟日本ウニマ副会長、やまびこ座・こぐま座芸術監督、さっぽろ人形浄瑠璃あしり座代表、人形劇団野良犬Plus代表



本のご案内「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ③

岸 春江(きし はるえ)

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士
自宅に約3000冊の絵本を所有
主宰の絵本部「ファンタジア」は2019年 北海道読書推進運動協議会 「優良読書グループ 奨励賞」受賞



「紳士とオバケ氏」

たかどのほうこ・作 飯野和好・絵/フレーベル館

一人暮らしをしているまじめな紳士マジノ・マジヒコ氏の前に、ある日白い服を着た人がプカンと現れます。それはマジヒコ氏そっくりのオバケ氏だったのです。オバケ氏は夜中にマジメな空気をかき混ぜ、ほぐしているのです。それ以降、紳士と夜中に現れるオバケ氏の交流が始まります。私の娘が寝るときに絵本を読んでいた頃、ネットの口コミを見て注文した一冊です。ところが、届いてびっくり。絵本ではなく児童書。しかも児童書にしては登場人物も内容も渋い。渋すぎる。当時小1の娘が自分で読むにも漢字が多くて早すぎました。試しに第1章を読み聞かせてみたら、「もっと! もっと!」のアンコール。それを何度も繰り返して、私の人生で一番声に出して読んだ児童書となりました。



「ねこがさかなをすきになったわけ」

ひだのかな代/みらいパブリッシング

地球上で初めてのネコが王様に大切にされながらお城で暮らしていたとき、門の向こうの道端で苦しんでいた魚を見つけて助けてあげます。魚はお礼にいつも歌ってネコを楽しませてくれました。でも、あるきっかけで魚はネコのおなかに入ってしまうのです。ねこはどうして魚が好きなのでしょうか? 優しさの連鎖で元気になるおはなしです。この絵本との出会いは娘が1歳のときです。まっすぐな目でこちらを見つめる真っ赤なネコちゃん。表紙を開くと、柔らかな色使いに加え、白く縁取られた絵がとてもしゃんとしています。おはなしの中に出てくる「げーんきーをだーせーよー」のフレーズは、わが子にも自分にもパワーを与えてくれる魔法のことばとなりました。



編集後記

7月・8月猛暑の中、中島児童会館75周年記念事業が無事終了しました。その中の「よみかたりフェスティバル」では、札幌市内外で読み語りの活動を行う団体やアマチュア人形劇団13団体による連続公演が実現。それぞれの団体ならではの工夫を凝らした読み聞かせが披露され、とっても面白かった! 子どもたちがこのように地域で活動されている方々に支えられていることをあらためて実感しました! そんなこんなで、もう下半期!? (-_-;) (柳本)

お問い合わせ
お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからもご覧いただけます。

